

---

# ハネウマライダー

心の壁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハネウマライダー

### 【Nコード】

N5290F

### 【作者名】

心の壁

### 【あらすじ】

同じ陸上部の僕と先輩の、淡い恋物語。今回はちょっと短めです。

僕の目の前を彼女の尻尾が跳ねる。

まるで、犬が喜んで尻尾を振るみたいに。

僕の目の前で彼女の尻尾が跳ねる。

規則正しく。リズムに合わせて。

僕の目の前の彼女の尻尾が跳ねる。

先輩は、いつも僕の前を走る。

その、ポニーテールを揺らして

## ハネウマライダー

「どうしたの？考え事？」

と、先輩の顔が突然視界に入ってきた。

「え？あ、いや。別に」

今は、休憩中。僕はグラウンドの隅にあるベンチに座ってボーっとしていた。

「ふーん。キミらしくないなあ」

「そうですか？それでも色々考えてるんですよ」

「へえ。でも、考え事もほどにしなよ。もう休憩終わりだよ」

先輩に言われて慌てて腕時計を見た。休憩時間はもうあと一分もなかった。

「ほら、今日はこれでラストだから。いくよ」

「あ、はい」

そう先輩にせかされて、僕は練習に戻った。

先輩は、いつも僕の前を走る。僕の目の前で、先輩の尻尾が先輩の走るリズムに合わせて揺れる。

僕は、この光景が好きだ。

先輩が僕の前を走り、それについていく形で僕があとに続く。僕らは二年間それを続けていた。

「さつき、何考えてたの？」

「え？」

先輩が走りながら、後ろにいる僕に話しかけてきた。

「だから、さつき何考えてたの？」

先輩はさつきよりもアクセントを強めて言う。

「ああ、個人的なことですよ」

「あら。話してくれないんだ」

「あんまり一人で考え事してる内容話したくないですし」

「まあ、いいけどね」

僕達のいつもの練習。

それもあと数ヶ月で終わる。

理由は、先輩の卒業である。

先輩は、あと数ヶ月でこの学校を去ってしまう。

頭もよく、進路が早々に決まった先輩は、夏で引退せずに卒業まで部活をしに来てくれているが、それも残りわずか。

先輩がいなくなれば長距離は僕一人。

僕は先輩に卒業してもらいたくない。と思うのだがそれはわがままというものである。

だから、僕はこの先輩との残された時間を大切にして、一緒に練習したいと思う。

「先輩は、やっぱり高校でも陸上やるんですよね？」

練習が終わり、ダウンをしている時に僕は先輩を聞いた。

「うん、そうだよ。あつたりまえじゃん」

「先輩って、進路どこでしたっけ？」

「公南高校だよ。前にも言わなかったっけ？」

公南高校……。僕の学力じゃ、必死に勉強してもギリギリ行けるかどうかのライン……。

「どうしたの？あ、もしかして同じ高校に入りたいと思ってるんでしょー」

「え、ええ。まあ……」

僕は、また先輩と同じ高校で陸上をやりたいと思っていた。

僕が先輩と一緒に練習するには、そんな方法しか思いつかなかったのだ。

「キミが私と同じ高校に入るには、もうちょっとがんばって勉強しないと駄目かもね」

「ははは、そうですよね」

こうやって先輩と一緒に練習して、一緒に話をするこの日常が、僕は好きだ。

ある日、休憩中のことだった。

僕がベンチに座ってダラダラ休んでいるところに、先輩がやってきた。

「ねえ、ちょっと相談があるんだけど……」

先輩が深刻そうな顔でそうなので、僕は身構えた。

「は、はい。なんでしよう」

先輩は僕の横に座る。

「私さ、卒業前にやっておきたいことがあってさ」

「はい」

「三年五組に、松本君っているんだ」

「ああ、先輩の隣のクラスですね」

なんだろう。

その次に出てくる台詞は、

聞きたくない気がする。

「私、その人に告白しようと思うんだ」

「え？」

なぜか、

僕は、

動揺した。

「どうしたらいいだろう。どういうタイミングで言えばいいかわかんなくってさ……。そういう小説とかよく読むけど、やっぱり実際こうなってみるとわかんないんだよねえ。私、こういうの初めてだからさ」

もう、僕はそれから先の会話の内容をよく覚えていない。

何故だろう。

僕はなぜ、動揺したのだろう。

僕は先輩と、一緒に練習がしたいだけなのに。  
僕は先輩の尻尾を追いかけるのが好きなだけなのに。  
僕は、先輩の笑顔が好きだけなのに。  
僕に話しかける先輩は、笑顔なのに。  
その笑顔は、僕に向けているものではないと気づいた瞬間、何かもやがかったような感じが僕の胸の中に現れた。

「五組の松本？ああ、あいつか」

短距離の中山先輩を放課後につかまえて聞いてみた。

「松本は、なかなかいいヤツだと思うよ。結構成績もいいみたいだし」

む、先輩はそんな人が好みだったのか……。

「で、なんでそんな事聞くんだった？」

「え、いや。なんとなく気になったんで……」

「ふーん。まあいいや。練習頑張れよ」

「はい！」

と大きく返事をして、僕はその先輩を見送った。

この先輩は陸上にそこまで情熱を燃やしているわけでもないらしいので、夏で引退し、それ以来たまに顔を出す程度である。それが悪い事だとは言わないが、部員が少ないから、なんかもうちょっと気を使って欲しいとか思ったりもする。

その他の先輩にも、軽く調査を試みたところ、どうやら松本先輩というのは中々の美形で女子からの評判も結構いいらしい。勉強も出来てスポーツも出来る。なんて万能野郎なんだ。

先輩が好きになるといっても、おかしくはない人だった。それが、僕の胸をとて痛めつけた。

先輩が、松本先輩に告白するといったときから、生まれたこの妙な感覚は、いったいなんなのか。僕にはまったく理解する事が出来なかった。

先輩の恋が成就してくれれば、先輩は笑い続けるはず。

僕は先輩の笑顔が好きなのだ。

だが、それは何か違う。

正しいのだが、何か違う。

何だろう。この感情は。

先輩が、告白すると決めた日は、三日後のバレンタインデー。



先輩が練習に来なかった。

今日は、バレンタインの翌日である。

昨日は事前に部活を休むという連絡があったのだが、今日は連絡がない。

先輩は無断欠席をする人じゃないので、なにかあったはずだ。

仕方がないので、今日も一人で練習をし、部活が終わったあとに僕は先輩の家へと向かった。

先輩の家は僕の登下校ルート上に存在する。

朝練の時や部活帰りのときに、朝は僕が迎えに行き、放課後は先輩を家に送って帰る。いつもそんな風に過ごしてきた。

先輩の住む二階建ての一軒家が見えてきたところで、僕は先輩にメールを送る。

『部活に来ませんでした、今日はどうしたんですか？』

先輩の家にたどり着いたところで、返信が来る。

『ごめんね。今日は、ちょっと連絡するの忘れちゃった』

先輩の家の前で、僕はメールを返信する。

『今、先輩の家の前にいます』

数秒後、二階の窓から先輩が顔を出した。辺りが暗いのでよく分からないが、いつもの笑顔ではなかった。

『こんばんは。先輩』

先輩が今日来なかった理由なんて、僕には予想が出来た。

『いったい、どうして今日は来なかったんですか？部活』

だが、あえて聞いた。いつもの調子で。

すると、先輩は窓から顔を引っ込めた。その後、先輩は玄関から現れた。

『少し……話そうか』

窓の下からでは分からなかったが、僕の目の前に現れた先輩の目は、ウサギの目になっていた。

先輩の家の近くにある公園まで来た。

日も落ちかけて遊んでいる子供もいなくなった寂しい公園で、僕はベンチに腰掛けた。

先輩は、長い間黙ったままだった。紡ぐ言葉を考えているのだろう。

そんな先輩を見かねて、僕のほうから切り出そうとした瞬間、先輩が静寂を破った。

「ねえ」

元氣のない、いつもの先輩とは違うトーン。

「私、振られちゃった」

先輩の悲しげな声が、寂しい公園に響く。それがとても哀しくて、僕のほうが泣きそうになる。

「昨日、チヨコを渡すと共に告白したんだけどさ、ダメだった」

先輩の声が、だんだん震え始める。

「私、今まで誰にも言ってなかったけど、あの人の事、大好きだったんだ……」

その台詞が僕の胸に突き刺さる。

「それでね、昨日帰ってから、今日まで、ずっと泣いてたの」

先輩の頬に、雫が一粒、流れた。

「あれ……、ちよつと前に落ち着いたはずなんだけども……。キミに話したら……、また、涙が止まらなくなっちゃった……」

僕は、先輩が笑顔でいて欲しかった。

だから、この恋は成就して欲しかった。

だって、先輩が笑顔でいられるから。

でも、それは叶わなかった。

ならば、僕がする事は。

「え？ちよつ……、なにしてんのっ！」

僕は、先輩を抱きしめていた。

「先輩の、笑顔が大好きです」

笑顔が好き。

一緒に練習するのが好き。

いや。

違う。

僕は。

「先輩の笑顔は、僕が守ります」

僕は先輩が好きなんだ。

先輩の事が好きなんだ。

「だから、泣かないでください」

そついうと、突然抱きしめられていた先輩の体から緊張がとれた。

「……うん。ありがとう。でも」

先輩は、両手を突き出すように僕を離れた。そして、服の袖でぐしぐしと涙を拭くと、こう言った。

「もう少し待ってて。気持ちの整理がついたら、返事をするから」  
ウサギの目をした先輩は僕に微笑んだ。

それから、僕と先輩は特に何もなく、ただ一緒に練習して一緒に話をして一緒に登下校するいつもの毎日だった。

そして、先輩の卒業の日。

先輩は僕だけじゃなく部員の中でも色々と人気だったり、在校生の中でも色々と支持があるらしく、先輩やその他を取り囲む集団に僕は入り込む余地がなかった。

結局、そのまま先輩を見失ってしまったので、ここにくれば確実に先輩に会えるだろうと思える場所にきた。

先輩の家である。

僕は先輩に『家の前で待ってます』とメールを送った。

そのまま先輩の返信を待っていたら、誰かが近づいてきた。

「やあ、待った？」

先輩だった。

「いえ、大丈夫ですよ。それよりどこに行ってたんです？」

「いやね、いろんな人に呼ばれたりしちゃってさー。なんか、色んなトコ回ってたんだ」

「だから在校生の僕よりも遅かったんですね」

「うん。そういうこと」

よく見ると、先輩が着てるブレザーには色々足りないものがあった。

僕達の通う学校には、親しかった友人たちに自分の制服についてるものをあげるという妙な風習があったのだが、先輩のブレザーにはそれがほとんどついてなかった。

「先輩……、それ……」

「ん？ああ、色々せがまれちゃってね。第二ボタンとかブレザーには関係ないしそれ以前に私は女の子だって言うのにね。校章も、名

札も全部あげちゃった」

「それって、全部じゃないですか？」

「うん。そうだね」

僕の分は、残っていないというのか。

「でも」

先輩は言葉を続ける。

「これは、キミのために残しておいたよ」

と、先輩が駆け寄ったと思ったら

唇に、やわらかい感触があった。

先輩はすぐに僕から顔を離し、僕にクルリと背を向ける。

先輩の尻尾が、僕の鼻をかすめた。

「……私の初めてだから」

尻尾の向こうで、先輩はそうつぶやく。

僕は、いまさらになって心臓がフルスピードで動き出した。

「もう少しがんばれば、キミも私と同じ高校に入れるよ」

先輩はそう告げる。

「キミには、ずうっと私の後ろを走ってきてほしいな。後ろで、私を支えて、一緒に走ってくれるかい？」

かすかに見える頬を赤らめながら言っている先輩が、とても愛おしくて。

僕は、大きく返事をした。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5290f/>

---

ハネウマライダー

2010年10月8日15時42分発行